

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール

設置マニュアル



Part No. 821-2391-10, Rev. A
2010年6月

Copyright © 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複製、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS. Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

目次

このマニュアルの使用方法 vii

1. Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置準備 1
 - サーバーモジュールの出荷 1
 - サーバーモジュールのオプションのコンポーネントの位置 2
 - サーバーモジュール仕様 5
 - 物理仕様 5
 - 電氣的仕様 5
 - 環境要件 6
 - サーバーモジュールの設置作業のチェックリスト 6
 - 一般的に使用される用語 9
2. Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置と電源投入 11
 - サーバーモジュールのフロントパネルインジケータ、ボタン、およびポート 12
 - サーバーモジュールのシャーシへの設置 13
 - インストールを開始する前に 13
 - ▼ 電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置する 14

- サーバーモジュールの電源投入 16
 - ▼ サーバーのスタンバイ電源状態を確認する 16
 - ▼ サーバー SP およびホストに主電源を供給 17
 - ▼ サーバーの電源を切る 18
 - ▼ サーバーの電源状態のトラブルシューティング 18
- ドングルケーブルによるサーバーへのデバイスの接続 19
 - ▼ 3 ケーブルドングルを使用してデバイスをサーバーに接続 20
- 3. ILOM の設定 21
 - IP 設定作業のチェックリスト 22
 - ILOM へのログイン 23
 - ▼ シリアル接続を使用して ILOM にログインする 24
 - ▼ Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする 25
 - IP アドレスの設定 26
 - DHCP ネットワークの設定 26
 - ▼ SP ネットワーク構成に DHCP を使用する 26
 - 静的ネットワークの設定 27
 - ▼ CLI を使用してサーバーモジュール SP に静的 IP アドレスを割り当てる 28
- 4. インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定 29
 - インストールを開始する前に 30
 - サーバー RAID ドライブの設定 30
 - インストールのためのワークシート 30
 - インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定 34
 - ▼ ネットワーク経由でのシステムへのアクセス 34
 - ▼ システムへのローカルなアクセス 35
 - ▼ インストール済みの Solaris 10 OS を設定する 37
 - ▼ (省略可能) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト 37
 - ▼ (省略可能) GRUB メニューを自動起動に変更する 38

Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報	39
Solaris 10 のユーザーマニュアル	39
Solaris インストールプログラムの使用	40
Solaris オペレーティングシステムの再インストール	40
Solaris オペレーティングシステムのダウンロード	40
索引	41

このマニュアルの使用方法

この設置マニュアルでは、Oracle の Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの Sun Blade 6000 シリーズシャーシへの設置、サービスプロセッサへの接続、およびプリインストールされた Oracle Solaris オペレーティングシステムのオプションの設定 (注文した場合) について説明します。

製品情報

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールについては、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/x6270m2>

このサイトには、次の情報とダウンロードへのリンクがあります。

- 製品情報および仕様
- サポートされているオペレーティングシステム
- ソフトウェアとファームウェアのダウンロード
- サポートされているオプションカード
- サポートされている Network Express Module
- 外部ストレージオプション
- システムハンドブック

関連ドキュメント

次の表に記載されているドキュメントは、次の Web サイトから入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/blade.x6270m2#hic>

タイトル	コンテンツ	Part No.	形式
『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールご使用にあたって』	サーバーモジュールに関する最新情報	821-2400	PDF HTML
『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールご使用の手引き』	サーバーモジュールの設定に関する基本的な設置情報	821-0494	PDF 印刷
『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール設置マニュアル』	サーバーモジュールを設定するための詳細なインストール情報	821-2391	PDF HTML 印刷物
『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』	Linux、Oracle、VM、VMware、および Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール手順	821-2394	PDF HTML
『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド』	Windows Server オペレーティングシステムのインストール手順	821-2397	PDF HTML
『Sun Installation Assistant 2.3 through 2.4 User's Guide for x64 Systems』	Sun Installation Assistant (SIA) を使用して Windows または Linux オペレーティングシステムをインストールする手順	821-0694	PDF HTML
『Sun Blade X6270 M2 Server Module Service Manual』	サーバーモジュールを管理およびアップグレードするための情報および手順	821-0499	PDF HTML
『SAS-1/SAS-2 Compatibility Upgrade Guide』	SAS-1/SAS-2 ファームウェアリビジョンの取得、およびアップグレードの実行に関する詳細	821-1800	PDF HTML
『Sun Server CLI ツールおよび IPMItool 2.0 ユーザーズガイド』	CLI ツールおよび IPMItool のインストール、設定、使用に関する情報	821-1600	PDF HTML

タイトル	コンテンツ	Part No.	形式
『Oracle x86 サーバー診断ガイド』	x86 サーバーに付属する診断ソフトウェアツールの使用方法に関する情報	820-6750	PDF HTML
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (以前の Sun Integrated Lights Out Manager マニュアルセット)	ILOM 3.0 をサポートするサーバーとおよびサーバーモジュールに共通の ILOM 機能とタスクについてのドキュメント	820-7382 820-7370 820-7373 820-7376 820-7379	PDF HTML
『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 補足マニュアル Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール』	Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールに固有の ILOM 情報	821-2403	PDF HTML
『Sun Blade X6270 M2 Server Module Safety and Compliance Manual』	サーバーモジュールに対するハードウェアの安全性および適合性の情報	821-0500	印刷
Sun ハードウェアシステムの重要な安全性に関する情報	すべての Sun ハードウェアシステムについての、多言語対応ハードウェアの安全性とコンプライアンスに関する情報	821-1590	印刷

これらのドキュメントの一部については、この表の上に記載されている Web サイトで翻訳版が入手可能です。英語版は頻繁に改訂されており、翻訳版よりも最新の情報が記載されています。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

機能	URL
マニュアル	http://docs.sun.com
サポート	http://www.sun.com/support/
トレーニング	http://www.sun.com/training/

表記上の規則

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
AaBbCc123	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm filename と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep `^#define ` XV_VERSION_STRING`

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

ドキュメントのコメント

本書に関するご意見をお待ちしております。コメントは下記 Web サイトの「Feedback [+]」リンクをクリックしてお送りください。

<http://docs.sun.com>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルと Part No. を記載してください。

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール設置マニュアル, 821-2391-10。

製品のダウンロード

最新のソフトウェア製品をダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/goto/x6270m2>

このサイトで、リンクを探し、次の項目に移動できます。

- Tools and Drivers DVD イメージ
- Sun Installation Assistant DVD イメージ
- Sun Validation Test Suite (SunVTS) の更新プログラム

第1章

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置準備

この章は、次の節で構成されています。

- [1 ページの「サーバーモジュールの出荷」](#)
- [5 ページの「サーバーモジュール仕様」](#)
- [6 ページの「サーバーモジュールの設置作業のチェックリスト」](#)
- [9 ページの「一般的に使用される用語」](#)

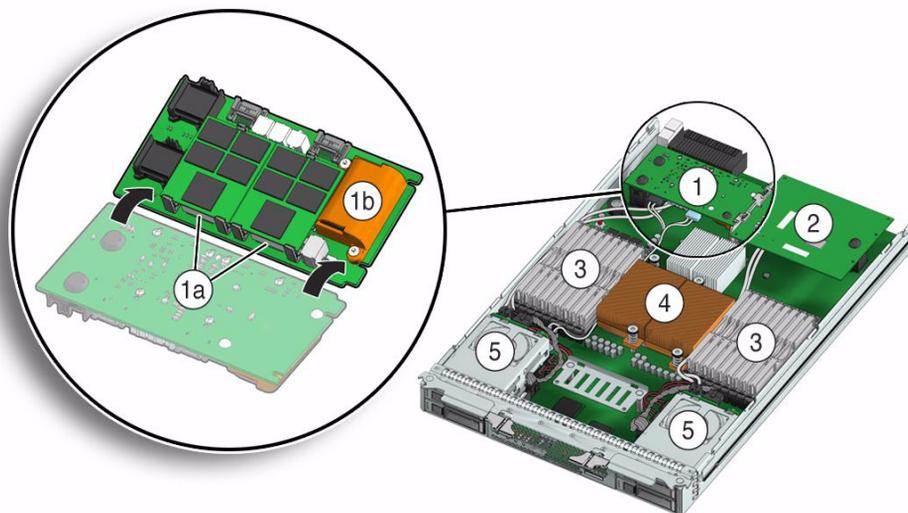
サーバーモジュールの出荷

Oracle の Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの標準構成は、工場を組み立てられ、Sun Blade 6000 シリーズシャーシに設置可能な状態で出荷されます。標準構成と別に購入したオプションのサーバーモジュールコンポーネントは、別に出荷されます。オプションの設置は、ほとんどの場合、サーバーモジュールをシャーシに設置する前に行う必要があります。

サーバーモジュールのオプションのコンポーネントの位置

図 1-1 に、この章に記述されている Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールのオプションのコンポーネントの位置を示します。

図 1-1 Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールのオプションのコンポーネントの位置



図の説明 サーバーモジュールのオプションのコンポーネント

-
- 1 ファブリック拡張モジュール (FEM) (オプションコンポーネント)
注 - インセットは、マザーボードとの直接接続と交換可能コンポーネントを示しています。
 - 1a パススルー FMOD ライザー
 - 1b エネルギーストレージモジュール (ESM)
 - 2 RAID 拡張モジュール (REM) (オプションコンポーネント)
 - 3 DIMM (オプションコンポーネント)
注 - 図 1-1 に示す DIMM には、フィラーパネルが装着されています。
 - 4 ヒートシンクが装着された CPU (最大 2 個の CPU を設置可能)
 - 5 ストレージデバイス (ハードディスクドライブまたはソリッドステートドライブ)
-

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの標準およびオプションのコンポーネントの概要を表 1-1 に示します。

表 1-1 Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールコンポーネント

X6270 M2 サービス モジュール	説明
標準サーバーコン ポーネント	<p>Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールには、次の標準コンポーネントが付属します。</p> <ul style="list-style-type: none">• サービスプロセッサ (Service Processor, SP) – サーバー 1 台につき 1 つ。SP は、リモートキーボード、マウス、およびビデオ機能、IPMI Baseboard Management Controller (BMC) 機能、およびシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module, CMM) へのインタフェースを提供します。SP と CMM の組み合わせによって、完全なサーバーモジュールおよびシャーシ管理システムが構成されます。• インジケータとボタン – Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールには、標準のサービスインジケータ LED とボタンがあります。• 柔軟な I/O ネットワーク接続 – サポートされる I/O ネットワーク接続には、オプションのコンポーネントである、ファブリック拡張モジュール、シャーシ Network Express Module、およびシャーシ PCI Express Module を含めることができます。• フロントパネル I/O デバイス接続 – Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールのフロントパネルには、ドングルケーブルを使ってサーバーに直接デバイスを接続するためのユニバーサル接続ポートがあります。
設置済みの CPU およびメモリ構成	<p>サーバーは、設置済みのメモリおよび CPU 構成で注文され、出荷されるのが普通です。Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールに対して提供 (出荷) される設置済みのメモリおよび CPU アセンブリを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none">• Intel Xeon 6 コア X5680 x 1、3.33GHz、12MB キャッシュ、6.40 GT/s QPI、HT、ターボブースト、130W (ヒートシンク付き)• Intel Xeon 6 コア X5670 x 1、2.93GHz、12MB キャッシュ、6.40 GT/s QPI、HT、ターボブースト、95W (ヒートシンク付き)• Intel Xeon 4 コア E5620 x 1、2.40GHz、12MB キャッシュ、5.86 GT/s QPI、HT、ターボブースト、80W (ヒートシンク付き)

表 1-1 Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールコンポーネント (続き)

X6270 M2 サービス モジュール	説明
オプションコン ポーネント	<p>次のオプションのサーバーモジュールコンポーネントを注文できます。これらは別に出荷されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • CPU アセンブリオプション • DDR3 メモリキット • SATA および SAS ストレージドライブ • ドングルケーブルオプション • ファブリック拡張モジュール (Fabric Expansion Module、FEM) オプション • RAID 拡張モジュール (RAID Expansion Module、REM) オプション • オペレーティングシステムソフトウェア • 印刷ドキュメント – 『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール設置マニュアル』 (821-2391) <p>注 – サーバーコンポーネントとその Part No. は、将来変更される可能性があります。サーバー用交換可能コンポーネントの最新のリストについては、次の URL にアクセスしてください。 http://oracle.com/goto/blades</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. サーバーの名前とモデルをクリックします。 2. コンポーネントのリストを表示するには、製品ページで「Full Components List」をクリックします。
サポートされてい るオペレーティ ングシステム	<p>Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールでは、次のオペレーティングシステムがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Oracle Enterprise Linux 5.4 (64 ビット) • Oracle VM 2.2.1 • Oracle Solaris 10 10/09 以降 • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Datacenter (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Enterprise (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Standard (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.4 (64 ビット) • SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10 SP3 (64 ビット) • SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 (64 ビット) • VMware ESX および ESXi 4.0 Update 1

サーバーモジュール仕様

物理仕様

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールは 12.9 x 20.1 x 1.7 インチで、1U フォームファクタを採用しています。サーバーモジュールは、Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシに設置するように設計されています。Sun Blade 6000 モジュラーシステムの詳細な仕様については、シャーシのドキュメントを参照してください。

表 1-2 に、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの物理仕様を示します。

表 1-2 Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの物理仕様

	英語	メートル法
高さ	12.87 インチ	327 mm
幅	1.7 インチ	44 mm
奥行	20.16 インチ	512 mm
重量	17 ポンド	7.71 kg

電氣的仕様

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールは Sun Blade モジュラーシステム (シャーシ) に接続します。モジュラーシステムは各サーバーモジュールに 12 V 主電源を供給し、ファンによる冷却を行います。シャーシは、12 V 主電源のほかに 3.3 V AUX 電力を各サーバーモジュールに供給します。これはローカルの FRU ID EEPROM 用の電源となります。この 3.3 V の補助電源があるため、シャーシ監視モジュール (CMM) は、主電源および 12 V ファン電源の供給より前に、各サーバーモジュールスロットに対してクエリーを実行し、シャーシに設置されたサーバーモジュールをサポートするのに十分な電力と冷却機能があることを確認できます。

環境要件

表 1-3 に、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの環境要件を示します。

表 1-3 Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの環境要件

条件	要件
動作時の温度	5 °C - 35 °C 結露なし
非動作時の温度	-40 °C - 65 °C
動作時の湿度	10 - 90%、結露なし (最高湿球温度 27 °C)
非動作時の湿度	93%、結露なし (最高湿球温度 38 °C)
動作時の高度	3048 m、35 °C で
非動作時の高度	12,000 m

サーバーモジュールの設置作業のチェックリスト

表 1-4 に、Sun Blade 6000 シリーズモジュラーシステムにサーバーモジュールを正しく設置するための作業手順を示します。

注 – Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールを、SAS-1 Network Express Module (NEM)、または SAS-1 NEM と Sun Blade 6000 ディスクモジュールが搭載された Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシに挿入すると、サーバーモジュールの SAS-2 REM が停止する場合があります。この問題を防止するには、SAS-1 コンポーネント (SAS-NEM およびディスクモジュール) のファームウェアを、SAS-1 と SAS-2 の共存をサポートするファームウェアバージョンにアップグレードする必要があります。このアップグレードは、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールをシャーシに挿入する前に行う必要があります。少なくとも、Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシで SAS-1 と SAS-2 の両方のデバイスが共存できるように、SAS-1 NEM および Sun Blade 6000 ディスクモジュール用のすべての SAS エクスパンダをファームウェアリビジョン 5.04.03 にアップグレードする必要があります。ファームウェアを取得してアップグレードを行う方法については、『SAS-1/SAS-2 Compatibility Upgrade Guide』(821-1800) を参照してください。

表 1-4 設置作業のチェックリスト

手順	作業の説明	手順については、次を参照してください。
1	Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールと、サーバー用に注文したオプションのコンポーネントを、梱包から取り出します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 1 章 1 ページの「サーバーモジュールの出荷」
2	電源が入っている Sun Blade 6000 シリーズシャーシにサーバーモジュールを設置します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 2 章 11 ページの「Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置と電源投入」
3	サーバーモジュールの電源状態を確認し、サーバーモジュール SP およびホストに主電源を供給します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 2 章 11 ページの「Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置と電源投入」
4	管理ステーションを接続して、IP アドレスを設定します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 2 章 11 ページの「Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置と電源投入」
5	ILOM にログインして IP アドレスを設定します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 3 章 21 ページの「ILOM の設定」
6	Oracle Solaris オペレーティングシステムを注文した場合は、SAS または SATA ストレージドライブ上に出荷時にインストールされている OS のイメージを設定します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 4 章 29 ページの「インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定」
7	<p>該当する場合、次のいずれかのオペレーティングシステムをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> Oracle Enterprise Linux 5.4 (64 ビット) Oracle VM 2.2.1 Oracle Solaris 10 10/09 以降 Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.4 (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 10 SP3 (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 (64 ビット) VMware ESX および ESXi 4.0 Update 1 	<ul style="list-style-type: none"> Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド (821-2394)

表 1-4 設置作業のチェックリスト (続き)

手順	作業の説明	手順については、次を参照してください。
	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Datacenter (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Enterprise (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 SP2 Standard (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) • Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard (64 ビット、Hyper-V 使用権付き) 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド』 (821-2397)

一般的に使用される用語

次の表は、本書での Sun Blade 6000 シリーズシャーシへのサーバーモジュールの設置プロセスの説明で一般的に使用される用語を示しています。

表 1-5 一般的に使用される用語

用語	定義
サーバーモジュール	ブレードサーバーのハードウェア。
シャーシ	Sun Blade 6000 モジュラーシステムのハードウェア。 これらのシャーシシステムの詳細については、次の Web サイトで Sun Blade 6000 シリーズシャーシのドキュメントを参照してください。 http://docs.sun.com/app/docs/prod/blade.srvr#hic
CMM	シャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) のハードウェア。
SP	サーバーモジュールおよび CMM の組み込みサービスプロセッサ (Embedded Service Processor、SP)。
ILOM	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーモジュール SP および CMM SP で動作する、システム管理用の組み込み管理ソフトウェアです。 ILOM の詳細については、次の Web サイトで Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (以前の Sun Integrated Lights Out Manager マニュアルセット) を参照してください。 http://docs.sun.com/app/docs/prod/int.lights.mgr30#hic

第2章

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールの設置と電源投入

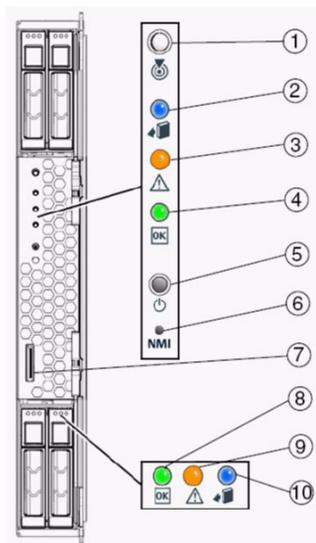
この章は、次の節で構成されています。

- 12 ページの「サーバーモジュールのフロントパネルインジケータ、ボタン、およびポート」
- 13 ページの「サーバーモジュールのシャーシへの設置」
- 16 ページの「サーバーモジュールの電源投入」
- 19 ページの「ドングルケーブルによるサーバーへのデバイスの接続」

サーバーモジュールのフロントパネル インジケータ、ボタン、およびポート

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールには、前面パネルに標準のインジケータとボタン、およびユニバーサルコネクタポートがあります。LED、ボタン、およびポートの場所については、[図 2-1](#) を参照してください。

図 2-1



図の説明 サーバーモジュール LED、ボタン、およびポート

-
- 1 サーバーモジュール位置特定 LED - 白色
 - 2 サーバーモジュール取り外し可能 LED - 青色
 - 3 サーバーモジュール保守要求 LED - オレンジ色
 - 4 サーバーモジュール OK/電源 LED - 緑色 (点滅または常時点灯)
 - 5 サーバーモジュール電源ボタン/リセット
 - 6 マスク不可割り込み (Non-Maskable Interrupt、NMI) ボタン (保守専用)
 - 7 ドングルケーブル用ユニバーサルコネクタポート (Universal Connector Port、UCP)
 - 8 HDD OK/電源 LED - 緑色
 - 9 HDD 保守要求 LED - オレンジ色
 - 10 HDD 取り外し可能 LED - 青色
-

サーバーモジュールのシャーシへの設置

電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置するには、次の節を参照してください。

- 13 ページの「インストールを開始する前に」
- 14 ページの「電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置する」

インストールを開始する前に

電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

- Sun Blade 6000 シリーズシャーシに、次のコンポーネントが設置されて電源が入っていることを確認してください。

- シャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM)
- Network Express Module (NEM)
- 必要なケーブルがすべてシャーシに接続されていること
- システムシャーシの電源が入っていること

シャーシコンポーネントの設置、ケーブルの接続、シャーシの電源投入については、次の Web サイトにある Sun Blade 6000 シリーズシャーシのドキュメントを参照してください。 <http://docs.sun.com/app/docs/prod/blade.srvr#hic>

- Sun Blade 6000 シリーズシャーシのドキュメントで、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールを正しく設置して設定するために必要な設置作業を参照してください。詳細は、表 1-4 を参照してください。

注 – Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールを、SAS-1 Network Express Module (NEM)、または SAS-1 NEM と Sun Blade 6000 ディスクモジュールが搭載された Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシに挿入すると、サーバーモジュールの SAS-2 REM が停止する場合があります。この問題を防止するには、SAS-1 コンポーネント (SAS NEM およびディスクモジュール) のファームウェアを、SAS-1 と SAS-2 の共存をサポートするファームウェアバージョンにアップグレードする必要があります。このアップグレードは、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールをシャーシに挿入する前に行う必要があります。少なくとも、Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシで SAS-1 と SAS-2 の両方のデバイスが共存できるように、SAS-1 NEM および Sun Blade 6000 ディスクモジュール用のすべての SAS エクスパンダをファームウェアリビジョン 5.04.03 にアップグレードする必要があります。ファームウェアを取得してアップグレードを行う方法については、『SAS-1/SAS-2 Compatibility Upgrade Guide』(821-1800) を参照してください。

- 該当する場合、サーバーモジュールをシステムシャーシに設置する前に、次のオプションのサーバーモジュールコンポーネントを設置します。

- FEM、REM、DIMM、および CPU

手順については、『Sun Blade X6270 M2 Server Module Service Manual』(821-0499)を参照してください。

- Sun Blade サーバーモジュールをシステムシャーシに設置する際には、静電放電 (ElectroStatic Discharge、ESD) を防止するため、アースした静電気防止用リストストラップまたは同等の安全機器を使用してください。



注意 – 電子コンポーネントが静電気によって損傷すると、システムが永続的に使用できなくなるか、保守技術者による修復が必要になる可能性があります。電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するには、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

▼ 電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置する

1. Sun Blade 6000 シリーズシャーシの電源が入っていることを確認します。

シャーシの電源が入っている場合、ファンが動作し、OK/電源 LED が緑色に常時点灯します。OK/電源 LED は、シャーシのフロントパネルと背面パネルの両方にあります。シャーシの電源が入っていない場合、システムシャーシのドキュメントを参照してください。

2. シャーシの前面にある目的のサーバーモジュールのフィルターパネルの位置を確認し、フィルターパネルを取り外します。

レバーを引き出し、フィルターパネルを取り出します。

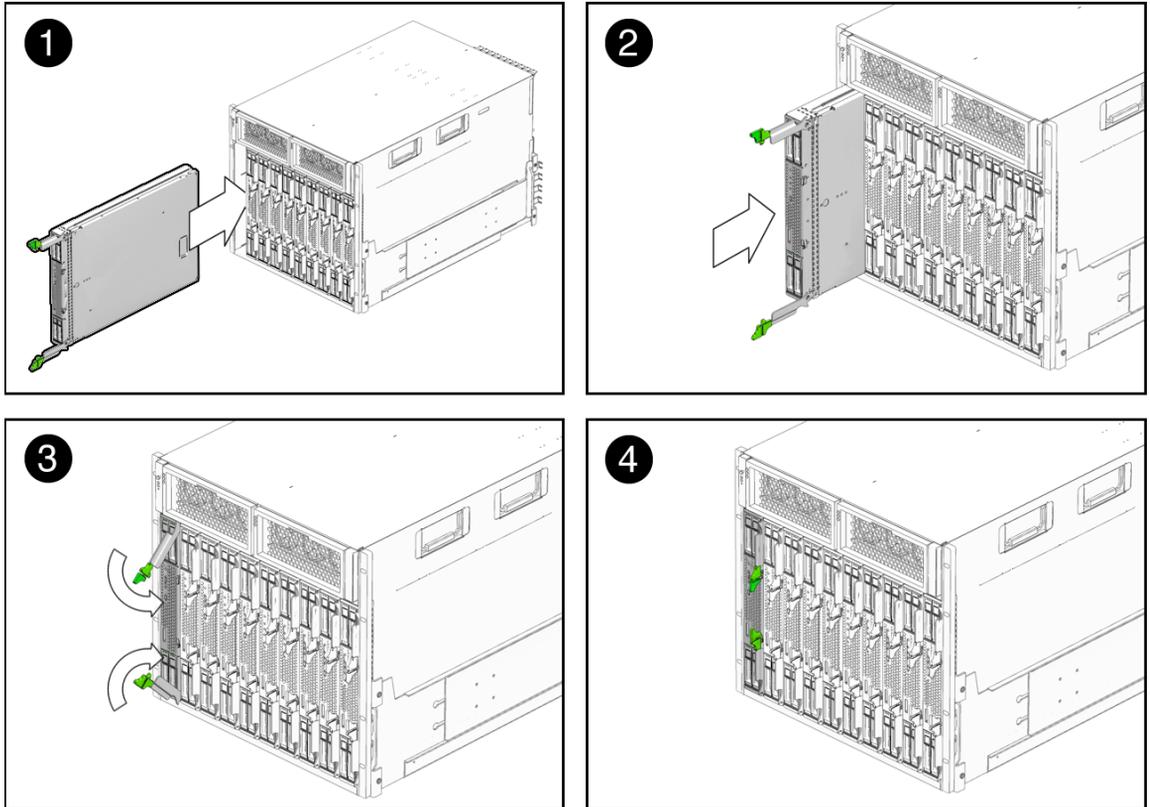


注意 – サーバーモジュールをスロットに設置しない場合は、サーバーモジュールのフィルターパネルをスロットから取り外さないでください。サーバーモジュールのフィルターパネルは、電磁妨害 (ElectroMagnetic Interference、EMI) に関する FCC の標準を満たすために必要です。

3. 取り外しレバーが右側になり、外側に突き出すように、サーバーモジュールを垂直に配置します。

次の図は、Sun Blade 6000 モジュラーシステムにサーバーモジュールを挿入したところを示しています。図 2-2 のボックス 1 を参照してください。

図 2-2 サーバーモジュールのシャーシへの挿入



4. サーバーモジュールをスロットに止まるまで押し込み、シャーシ前面と同じ高さになるようにします。

図 2-2 のボックス 2 および 3 を参照してください。

5. サーバーモジュールをシャーシにロックするには、次の手順を実行します。

- 上の取り外しレバーを下方向に、はまり込むまで回します。図 2-2 のボックス 3 を参照してください。
- 下の取り外しレバーを上方向に、はまり込むまで回します。図 2-2 のボックス 3 を参照してください。

サーバーモジュールがシャーシ内でロックされ (図 2-2 のボックス 4)、スタンバイ電源がサーバーモジュール SP に供給されます。

注 – サーバー SP のブートには数分かかる場合があります。サーバー SP のブート中には、OK/電源 LED がゆっくりと点滅します (0.5 秒オン、0.5 秒オフ)。サーバー SP がブートすると、OK/電源 LED はスタンバイ点滅 (0.1 秒オン、2.9 秒オフ) になります。スタンバイ点滅状態は、サーバー SP が動作中で、サーバーモジュールホスト (BIOS) の電源が切断されていることを示します。

サーバーモジュールの電源投入

電源が入っているシャーシにサーバーモジュールを設置すると、サーバーモジュール SP は自動的にブートし、シャーシ電源からのスタンバイ電源がサーバーモジュール SP に直接供給されます。この時点で、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続して、IP アドレスを設定できます。ただし、オペレーティングシステムをインストールしたり、サーバーモジュールを完全に機能させたりするには、サーバーモジュールホストに主電源を供給する必要があります。

Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール電源状態については、次のトピックを参照してください。

- [16 ページの「サーバーのスタンバイ電源状態を確認する」](#)
- [17 ページの「サーバー SP およびホストに主電源を供給」](#)
- [18 ページの「サーバーの電源を切る」](#)
- [18 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」](#)

▼ サーバーのスタンバイ電源状態を確認する

1. システムシャーシの電源が入っていることを確認します。

シャーシの OK/電源 LED が緑色に常時点灯しているはずですが、

シャーシの電源が入っていない場合、システムシャーシのドキュメントに従って、システムシャーシの電源を入れます。

2. サーバーモジュールの OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態であることを確認します。

サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態になります (0.1 秒オン、2.9 秒オフ)。スタンバイ点滅状態は、サーバーモジュール SP が動作中で、サーバーモジュールホストの電源が切断されていることを示します。

注 – サーバーモジュールの OK/電源 LED は、サーバーモジュールの電源を入れるのに十分なシャーシ電源が存在する場合だけ、スタンバイ点滅状態になります。シャーシ電源が不足している場合、サーバーモジュールの電源を入れるのに十分な電源が得られるまで、OK/電源 LED はオフのままになります。この問題を解決する方法については、[18 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」](#)を参照してください。

この時点では、スタンバイ電源がサーバーモジュール SP に供給されており、Integrated Lights Out Manager (iLOM) に接続して IP アドレスを設定できます。iLOM に接続して IP アドレスを設定する方法については、[第 2 章](#)を参照してください。

▼ サーバー SP およびホストに主電源を供給

オペレーティングシステムをインストールするには、サーバーモジュールホストに主電源を供給する必要があります。

1. サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態であることを確認します。

スタンバイ電源状態では、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED はスタンバイ点滅状態になります (0.1 秒オン、2.9 秒オフ)。

注 – CMM がシャーシに存在しないか、サーバー SP からアクセスできない場合、サーバー電源状態はスタンバイに設定されません。サーバーの OK/電源 LED はオフのままです。この場合、次の手順でサーバーの電源を入れることによって先に進みます。

2. サーバーモジュールのフロントパネルにある、埋め込み式の電源ボタンを押してから離します。

主電源が供給されると、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED が緑色に常時点灯します。常時点灯状態の LED は、サーバーモジュール SP とホストの両方の電源が入っていることを示します。

▼ サーバーの電源を切る

- 主電源モードからサーバーモジュールの電源を切るには、次の 2 つの方法のいずれかを使用します。
 - 正常な停止 – フロントパネルにある電源ボタンを押してから離します。

この操作により、ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効な OS では、適切な順序での OS シャットダウンが実行されます。ACPI が有効なオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行して停止します。
 - 緊急シャットダウン – 電源ボタンを 5 秒間押し続けると、主電源が切れてスタンバイ電源モードになります。

▼ サーバーの電源状態のトラブルシューティング

Sun Blade 6000 シリーズシャーシでサーバーモジュールの電源が入ると、シャーシは CMM に照会して、サーバーの電源を入れるのに十分な電力が電源ユニット (Power Supply Unit, PSU) から供給可能かどうかを確認します。サーバーモジュールの電源を入れるのに十分な電力がない場合、SP はサーバーモジュールへの電力供給 (スタンバイ電源、主電源とも) 拒否します。この状況が発生した場合、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED はオフのままです。この電源の問題を解決するには、次のガイドラインに従います。

1. ILOM のイベントログメッセージを見て、サーバーモジュールに電源投入の権限があるかどうかを確認します。サーバーモジュールの電源を入れるのに十分な電力が PSU から得られない場合、イベントメッセージがログに記録されます。

ILOM イベントログ、または消費電力の監視については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (Part No. は [viii ページの「関連ドキュメント」](#) を参照) を参照してください。
2. 現在設置されているすべてのシャーシコンポーネントの電源投入をサポートするのに十分な数の電源が、システムシャーシに設置されていることを確認します。

シャーシコンポーネントの電源投入に必要な電源の数については、システムシャーシのドキュメントを参照してください。
3. 電力損失を避けるため、電源に対するデフォルトの CMM 電源管理設定を ILOM で使用することをお勧めします。

電源管理については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 補足マニュアル Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール』(821-2403) の「電源管理ポリシー」を参照してください。

注 – 電源投入の権限が得られた場合、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態になります。

- 必要に応じて、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールに付属する起動診断ツールを実行する方法について、『Oracle x86 サーバー診断ガイド』(820-6750)を参照してください。

ドングルケーブルによるサーバーへのデバイスの接続

システムシャーシには、Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールに通信デバイスを直接接続するための次のドングルケーブルが付属しています。

- 3 ケーブルドングル II (Part No. 530-3936 オプション #4622A)。このケーブルは、VGA コネクタ、RJ-45 シリアルコネクタ、および 1 個のデュアル USB コネクタを提供します。

注 - 3 ケーブルドングル II は、Sun Blade 6000 シャーシに通常付属しています。ケーブルは追加購入できます。

ドングルケーブルの VGA または USB コネクタを使用して、サーバーモジュールの BIOS およびオペレーティングシステムと通信できます。または、シリアルコネクタを使用して、サーバーモジュール SP と通信できます。

注 - 個々のサーバーモジュールの直接管理は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の組み込みサーバーモジュール SP によって行われます。サーバーモジュール SP へのアクセスは、シリアルポートまたはシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module, CMM) 管理ネットワークを通じて行われます。ILOM でのサーバーレベル管理またはシャーシレベル管理については、システムシャーシのドキュメントまたは Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセットを参照してください。



注意 - ドングルケーブルは構成と保守の目的に使用します。構成または保守の操作が終了したら、ケーブルの損傷を防ぐため、ドングルケーブルをサーバーモジュールから取り外します。

▼ 3 ケーブルドングルを使用してデバイスをサーバーに接続

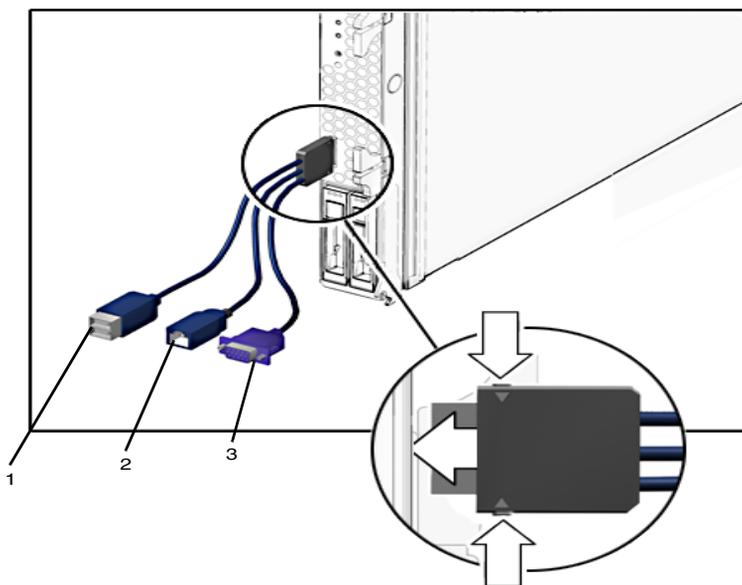
1. サーバーモジュールのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (Universal Connector Port、UCP) にドングルケーブルを差し込みます。

図 2-3 を参照してください。

2. ドングルケーブルのコネクタを適切なデバイスに接続します。

図 2-3 を参照してください。

図 2-3 ドングルケーブルの接続



図の説明 ドングルケーブルのコネクタ

-
- | | |
|---|-------------------|
| 1 | デュアル USB 2.0 コネクタ |
| 2 | RJ-45 シリアルポートコネクタ |
| 3 | VGA ビデオコネクタ |
-

第3章

ILOM の設定

この章では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアへのアクセス方法と、サーバーモジュールサービスプロセッサの IP アドレスの初期設定方法を説明します。

この章は、次の節で構成されています。

- [22 ページの「IP 設定作業のチェックリスト」](#)
- [23 ページの「ILOM へのログイン」](#)
 - [24 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」](#)
 - [25 ページの「Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする」](#)
- [26 ページの「IP アドレスの設定」](#)
 - [26 ページの「DHCP ネットワークの設定」](#)
 - [27 ページの「静的ネットワークの設定」](#)

IP 設定作業のチェックリスト

表 3-1 に、サーバーモジュール SP の IP アドレスを初期設定するための作業手順を示します。

表 3-1 IP アドレス設定作業

手順	要件	説明
1	サーバーモジュールをシャーシに設置します。	サーバーモジュールをシャーシシステムに正しく設置します。詳細は、このマニュアルの第 1 章および第 2 章を参照してください。
2	ILOM へのコンソール接続を確立します。	<p>ローカルまたはリモートコンソールを通じて、ILOM サーバーモジュール SP との接続を確立できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• ローカルシリアルコンソール。 ドングルケーブルを使って、サーバーモジュールのフロントパネルにある UCP ポートにシリアルコンソールを接続できます。ローカルデバイスをサーバーモジュールに接続する手順については、20 ページの「3 ケーブルドングルを使用してデバイスをサーバーに接続」を参照してください。 別の方法として、CMM の背面パネルにあるシリアルポートにシリアルコンソールを接続することもできます。CMM にケーブルやデバイスを接続する方法については、システムシャーシのマニュアルを参照してください。• リモートコンソール。 ローカルエリア Ethernet ネットワークケーブルを CMM のネットワーク管理ポート (RJ-45 NET MGT 0) に接続します。シャーシの Ethernet ポートを使用するのは、ILOM に接続するもっとも堅牢性の高い方法です。この接続方法では、ILOM コマンド行インタフェースと Web インタフェースの両方をサポートしています。CMM 管理ネットワークケーブルの接続方法については、システムシャーシのマニュアルを参照してください。

表 3-1 IP アドレス設定作業 (続き)

手順	要件	説明
3	管理者ユーザーアカウントを取得します。	ILOM に IP アドレスを設定するには、管理者アカウントで ILOM にログインする必要があります。 サーバーモジュール SP には、管理者アカウントが出荷時にすでに設定されています。設定済みの管理者アカウント名は root で、パスワードは changme です。この設定済みのアカウントは削除できないので、初期設定が終わったらパスワードを変更することを強くお勧めします。このアカウントからは、サービスプロセッサのすべての機能とコマンドへの組み込み管理者特権 (読み取りおよび書き込みアクセス) が利用できます。 ILOM のユーザーアカウントについては、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセット (以前の Sun Integrated Lights Out Manager マニュアルセット) を参照してください。
4	ILOM にログインします。	この章に記されている手順で、ILOM にログインします。 23 ページの「ILOM へのログイン」 を参照してください。
5	IP アドレスを設定します。	この章に記されている手順に従って、IP アドレスを初期設定します。 26 ページの「IP アドレスの設定」 を参照してください。
6	該当する場合、ILOM に関する追加情報を入手します。	ILOM の IP アドレスの設定または変更については、ILOM マニュアルセットを参照してください。

ILOM へのログイン

この節では、次の手順を説明します。

- [24 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」](#)
- [25 ページの「Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする」](#)

▼ シリアル接続を使用して ILOM にログインする

ここでは、CMM またはサーバー SP に IP アドレスを割り当てる前に ILOM にログインする手順について説明します。

1. サーバーモジュールまたは CMM へのシリアルコンソール接続のセキュリティが確保され、接続が正しく動作していることを確認します。
2. 次のシリアル通信設定が使用されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
3. Enter キーを押して、シリアルコンソールと ILOM の間の接続を確立します。
ILOM ログインプロンプトが表示されます。
4. 管理者アカウントを使って、ILOM のコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) にログインします。

```
SUNSP-<product serial number> login: root  
Password: changeme
```

ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。

注 – 各サーバーモジュール SP および CMM の出荷時に設定されているデフォルトの ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

CMM から ILOM にログインした場合は、サーバーモジュール SP の CLI に移動するために、次のコマンドを入力します。

```
-> start /CH/BLn/SP/cli
```

ここで、BLn は、このシャーシでサーバーモジュールが設置されているスロットを表します。

5. [26 ページの「IP アドレスの設定」](#)に進みます。

▼ Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする

Ethernet 接続を使用して ILOM にログインするには、CMM またはサーバー SP の IP アドレスがわかっている必要があります。

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用し、管理者アカウントのユーザー名と、CMM またはサーバー SP の IP アドレスを指定して、ILOM にログインします。

例:

```
ssh username@host
```

または

```
ssh -l username host
```

host は IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

パスワードの入力を求める ILOM のプロンプトが表示されます。

2. 管理者アカウントのパスワードを入力します。

例:

```
$ssh root@host  
Password: changeme
```

ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。

注 – 各サーバーモジュール SP および CMM の出荷時に設定されているデフォルトの ILOM 管理者アカウントは `root`、パスワードは `changeme` です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

CMM から ILOM にログインした場合は、サーバーモジュール SP の CLI に移動するために、次のコマンドを入力します。

```
-> start /CH/BLn/SP/cli
```

ここで、*BLn* は、このシャーシでサーバーモジュールが設置されているスロットを表します。

3. IP アドレスを表示または変更するには、[26 ページの「IP アドレスの設定」](#)に進みます。

ILOM の設定を変更する方法については、ILOM マニュアルセットを参照してください。

IP アドレスの設定

静的 IP アドレスまたは動的 IP アドレスのどちらかを設定できます。手順については次の節を参照してください。

- [26 ページの「DHCP ネットワークの設定」](#)
- [27 ページの「静的ネットワークの設定」](#)

DHCP ネットワークの設定

デフォルトでは、SP は動的ホスト構成プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol、DHCP) サーバーを使用してネットワーク構成を行います。動的 IP アドレス設定を選択した場合は、次の節を参照してください。

- [22 ページの「IP 設定作業のチェックリスト」](#)
- [23 ページの「ILOM へのログイン」](#)
- [26 ページの「SP ネットワーク構成に DHCP を使用する」](#)

▼ SP ネットワーク構成に DHCP を使用する

注 – 次の手順では、システムが出荷時のデフォルト設定であることを前提とします。

1. DHCP サーバーが正しく設定されていることを確認します。
2. CMM の Ethernet ポート (NET MGT) に Ethernet ケーブルが接続されていることを確認します。
3. 該当する場合、サーバーモジュール SP の MAC アドレスを確認します。
MAC アドレスは、サーバーモジュールのカバーのラベルに記載されています。
4. 次のいずれかの手順で、ILOM にログインします。
 - [24 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」](#)
 - [25 ページの「Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする」](#)デフォルトで、ILOM は、DHCP を使用してネットワーク設定を取得しようとします。

5. 次のいずれかの方法を使用して、サーバーモジュール SP に割り当てられた DHCP IP アドレスを表示します。

■ ILOM – CMM

特定のサーバーモジュールに割り当てられている動的 IP アドレスを CMM から表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CH/BL0/SP/network
```

注 – ここで、BL0 はスロット BL0 に設置されているサーバーモジュールを表します。ターゲットサーバーモジュールを指定するには、サーバーモジュールが設置されているスロットの番号を指定します。サーバーモジュールのスロットの範囲は、Sun Blade 6000 シリーズシャーシでは 0 - 9 です。

■ ILOM – サーバー SP

サーバーモジュールに割り当てられている動的 IP アドレスを表示するには、次のように入力します。

```
-> show /SP/network
```

6. ILOM からログアウトするには、次のように入力します。

```
-> exit
```

静的ネットワークの設定

サーバー SP または CMM に静的 IP アドレスを割り当てる場合、次の項目を参照してください。

- [22 ページの「IP 設定作業のチェックリスト」](#)
- [23 ページの「ILOM へのログイン」](#)
- [28 ページの「CLI を使用してサーバーモジュール SP に静的 IP アドレスを割り当てる」](#)

注 – サーバーに IP アドレスを割り当てるには、ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェース (Command-Line Interface, CLI) を使用します。ILOM の Web インタフェースを使用して IP アドレスを割り当てる方法については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 マニュアルセットを参照してください。

▼ CLI を使用してサーバーモジュール SP に静的 IP アドレスを割り当てる

1. 次の手順のいずれかを使って、ILOM に接続し、ログインします。
 - 24 ページの「シリアル接続を使用して ILOM にログインする」
 - 25 ページの「Ethernet 接続と CLI を使用して ILOM にログインする」
2. ILOM CLI プロンプト (->) に次のコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。
-> **cd /SP/network**
3. 静的な Ethernet 構成を設定するには、次の例のアドレスを実際アドレスに置き換えて、次のコマンドを入力します。
-> **cd /SP/network**
-> **set pendingipaddress=IP address**
-> **set pendingipnetmask=Netmask address**
-> **set pendingipgateway=Gateway address**
-> **set pendingipdiscovery=static**
-> **set commitpending=true**
4. ILOM からログアウトするには、次のように入力します。
-> **exit**

第4章

インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

この章では、注文した場合にハードディスクドライブまたは半導体ドライブにインストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム (Operating System, OS) を設定する手順について説明します。インストール済みの Solaris のバージョンは、Solaris 10 10/09 以降です。

注 – SPARC システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもインストール済みの Solaris 10 イメージはモニターに出力されません。BIOS 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test, POST) とその他のブート情報が出力されます。

この章では、次の項目について説明します。

- [30 ページの「インストールを開始する前に」](#)
- [30 ページの「サーバー RAID ドライブの設定」](#)
- [30 ページの「インストールのためのワークシート」](#)
- [34 ページの「インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定」](#)
- [39 ページの「Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報」](#)
- [40 ページの「Solaris インストールプログラムの使用」](#)
- [40 ページの「Solaris オペレーティングシステムの再インストール」](#)

インストールを開始する前に

インストール済みの Solaris 10 OS の設定を行う前に、次の作業を行います。

- サーバー SP の IP アドレスを設定します。詳細は、[第 3 章](#)を参照してください。
- サーバーモジュールホストに主電源が供給されていることを確認します。詳細は、[16 ページの「サーバーモジュールの電源投入」](#)を参照してください。
- [30 ページの「インストールのためのワークシート」](#)に示す設定に必要な情報を調べます。デフォルト値はアスタリスク (*) で示されていることに注意してください。

注 – サーバーまたはほかのシャーシ部品の MAC アドレスを確認するには、Customer Information Sheet (部品に付属) を参照するか、サーバーまたはシャーシ部品に取り付けられている印刷された MAC アドレスラベルを検査します。

- 出荷時のサーバーのコンソールはシリアルポートにリダイレクトされています。出力を VGA (ビデオポート) に送ることもできます。詳細については、[37 ページの「\(省略可能\) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト」](#)を参照してください。

サーバー RAID ドライブの設定

サーバー RAID ドライブの設定は、インストール済みバージョンの Solaris 10 OS ではサポートされていません。RAID 構成でドライブを設定する必要がある場合は、『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュール Linux、仮想マシンソフトウェア、および Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』(821-2394) で Solaris 10 OS のインストール方法を参照してください。

インストールのためのワークシート

[表 4-1](#) のワークシートを使用して、インストール済みの Solaris 10 OS の設定に必要な情報を収集します。必要なのは、システムのアプリケーションに適用される情報を収集することだけです。

表 4-1 Solaris 10 OS 設定ワークシート

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	Solaris 10 ソフトウェアで使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> • ネットワークに接続されている • ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
DHCP を使用しない場合には、ネットワークアドレスを記入します:	IP アドレス	DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 129.200.9.1
	サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0
	IPv6	このマシンで Ipv6 を有効にするかどうか。
ホスト名	システムに対して選択したホスト名。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを有効にするかどうか。 「はい」の場合、以下の情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 最初の KDC: (オプション) 追加の KDC:	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*

表 4-1 Solaris 10 OS 設定ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
ネームサービス	ネームサービス	該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するかを入力します。
		<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
	ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。
	NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定するか、インストールプログラムに自動検出させるか。
		<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 自動的に指定*
	DNS	<p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索するドメインのリストを入力することもできます。</p>
		検索ドメイン:
		検索ドメイン:
		検索ドメイン:
	LDAP	LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します。
		プロファイル名:
		プロファイルサーバー:
		LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。
		プロキシバインド識別名:
		プロキシバインドパスワード:

表 4-1 Solaris 10 OS 設定ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定するか、Solaris インストールプログラムに自動検出させるか。</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定することができます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムを再起動すると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 • Solaris インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーターディスカバリ用のインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知していることが必要です。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムの起動時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 • この時点でルーターを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。再起動時にソフトウェアは、自動的に IP アドレスを検出しようとしています。 	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検出する • なし*
時間帯	デフォルトの時間帯を指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> • 地理的地域* • GM からの時差 • 時間帯ファイル
ルートパスワード	システムのルートパスワードを選択します。	

インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

注 – この手順を実行する前に、サービスプロセッサの IP アドレスをセットアップする必要があります。まだ実行していない場合は、[第 3 章](#)を参照してください。

サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを設定した後で、インストール済みの Solaris 10 オペレーティングシステム (OS) を、Secure Shell (SSH) を使用してネットワーク経由で設定するか、SER MGT ポートを使用してローカルで設定して、システムコンソールに接続できます。

設定の実行時には、[30 ページ](#)の「インストールのためのワークシート」で調べた情報を使用します。

▼ ネットワーク経由でのシステムへのアクセス

1. Secure Shell を使用し、`root` ユーザーアカウントまたは管理者アカウントのユーザー名、サーバー SP の IP アドレス、およびユーザーアカウントのパスワードを指定して、ILOM にログインします。

次の例は、`root` ユーザーアカウントとそのデフォルトパスワード `changeme` を使用して ILOM にログインする方法を示したものです。

```
$ ssh root@host
Password: changeme
```

`host` は IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンド行プロンプト (`->`) が ILOM に表示されます。

2. サービスプロセッサの通信プロパティがデフォルトに設定されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/serial/host
/SP/serial/host
  Targets:

  Properties:
    commitpending = (Cannot show property)
    pendingspeed = 9600
    speed = 9600

  Commands:
    cd
    show
```

注 – 速度が 9600 以外の値に設定されている場合は、次のコマンドを使用して変更します。

```
-> set /SP/serial/host pendingspeed=9600 commitpending=true
```

3. シリアルコンソールを起動します。次のコマンドを入力して、プロンプトに回答します。

```
-> start /SP/console
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
Serial console started.
```

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

▼ システムへのローカルなアクセス

1. ケーブルを使用して、サーバーモジュールの SER MGT ポートをクライアントシステムのシリアルポートに接続します。
2. システムコンソールにアクセスするには、次の方法のいずれかを使用して端末セッションを開始します。

- Solaris が動作中のシリアルコンソール:

適切なコマンドを入力して端末セッションを開始します。たとえば、次のように入力することにより、Solaris コンソールで端末セッションを開始できます。

```
$tip -9600 /dev/ttya
```

■ **Windows を実行しているクライアントの場合:**

端末セッションを開始するための適切なプログラムを開きます。たとえば、次の項目を選択することにより、Windows コンソールで端末セッションを開始できます。

「スタート」 -> 「すべてのプログラム」 -> 「アクセサリ」 -> 「通信」 -> 「ハイパーターミナル」

■ **Linux を実行しているクライアントの場合:**

適切なコマンドを入力して端末セッションを開始します。たとえば、Linux コンソールで端末セッションを開始するには、Minicom を起動します。

Minicom は、Linux ディストリビューションに含まれているテキストベースのシリアル通信プログラムです。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれている man ページを参照してください。

3. 端末デバイスで Enter キーを押して、端末デバイスを ILOM SP に接続します。ILOM のログインプロンプトが表示されます。

注 - ILOM SP に電源を投入する前、または電源投入シーケンス中にサーバーのシリアルポートに接続した場合、ILOM のログインプロンプトが表示される前に SP のブートメッセージが表示されることがあります。

4. ユーザー名とパスワードを入力して、ILOM SP にログインします。

デフォルトのユーザー名は root、デフォルトのパスワードは changeme です。ILOM のデフォルトのコマンド行プロンプト (->) が表示されます。

5. サービスプロセッサの通信プロパティがデフォルトに設定されていることを確認します。次のコマンドを入力します。

```
-> show /SP/serial/host
/SP/serial/host
Targets:

Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  pendingspeed = 9600
  speed = 9600

Commands:
  cd
  show
```

注 - 速度が 9600 以外の値に設定されている場合は、次のコマンドを使用して変更します。

```
-> set /SP/serial/host pendingspeed=9600 commitpending=true
```

- シリアルコンソールを起動します。次のコマンドを入力して、プロンプトに回答します。

```
-> start /SP/console
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
Serial console started.
```

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

▼ インストール済みの Solaris 10 OS を設定する

- フロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。
サーバーへの電源投入の詳細は、[16 ページの「サーバーモジュールの電源投入」](#)を参照してください。
OS の起動時に、画面に POST メッセージが表示されます。
- (省略可能) POST が完了したら、コンソール出力をビデオポートにリダイレクトできます。
詳細は、[37 ページの「\(省略可能\) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト」](#)を参照してください。
- 画面上の Solaris 10 プリインストールプロンプトに従います。
- システムとネットワークの情報を指定するときは、[30 ページの「インストールのためのワークシート」](#)で調べた情報を入力してください。
サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。
システム設定情報の入力後、サーバーが起動プロセスを完了して、Solaris ログインプロンプトが表示されます。

▼ (省略可能) コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト

サーバーモジュールのコンソールは自動的にシリアルポートに送られます。しかし、GRUB メニューを使用して、シリアルコンソールをビデオポートに送るよう選択することができます。GRUB はオープンソースのブートローダーです。GRUB は、x86 ベースシステム版の Solaris OS のデフォルトブートローダーです。ブートローダーは、システムの電源を入れてから最初に実行されるソフトウェアプログラムです。

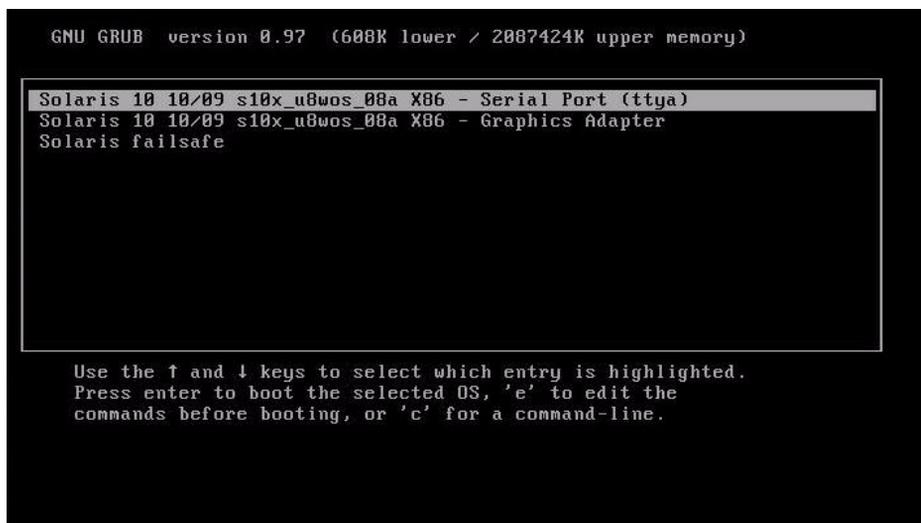
コンソール出力をビデオポートにリダイレクトするには、次の手順に従います。

1. サーバーの電源を投入して、POST メッセージを監視します。

POST が完了すると、GRUB メニューが表示されます。

GRUB メニューから、インストールプロセスを TTY 接続(シリアルポート) または VGA 接続(ビデオポート) に表示するオプションを選択できます (図 4-1 を参照)。

図 4-1



2. ビデオポートへの出力を表示するには、次のオプションを選択します。

Solaris 10 10/09 s10x_u8wos_u08a X86 – グラフィックスアダプタ

▼ (省略可能) GRUB メニューを自動起動に変更する

インストール済みのイメージの GRUB メニューは、電源投入時にコンソール出力を選択できるよう、タイムアウトが設定されていません。システムが自動起動するよう、この設定を変更できます。

システムが自動起動するよう GRUB メニューを変更するには、次の手順に従います。

1. GRUB メニューで **e** キーを押して、編集モードに入ります。

2. `/rpool/boot/grub/menu.1st` ファイルを編集して、タイムアウト行の `-1` の値を、メニューを表示しておく時間に変更します。

たとえば、遅延を 10 秒にするには、タイムアウト値を 10 に変更します。

3. デフォルトのブートエントリを指定する行を追加します。

たとえば、先頭エントリを指定するには、`default 10` を追加します。

Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報

この節には、Solaris 10 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。

Solaris 10 のユーザーマニュアル

Solaris 10 オペレーティングシステムのマニュアルは、次の Web サイトから入手できます。

<http://docs.sun.com>

Solaris 10 Documentation Collection のドキュメントのリストを表示するには、Solaris 10 を選択します。指定がある場合は、必ず x86 システムに固有の手順に従ってください。

- Solaris のインストールガイドについては、次を参照してください。
<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1236.1>
- Solaris 10 の管理ガイドについては、次を参照してください。
<http://docs.sun.com/apps/docs/coll/47.16>
- システムのアップグレードについては、『Solaris 10 10/09 インストールガイド (Solaris Live Upgrade とアップグレードの計画)』を参照してください。
- トラブルシューティング情報については、『Solaris 10 10/09 インストールガイド (カスタム JumpStart/上級編)』の「付録 A」を参照してください。
- パッチおよびその他の最新情報については、『Sun Blade X6270 M2 サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。

Solaris 10 のマニュアルは、Solaris OS ソフトウェアに添付されている Solaris Documentation DVD にも収録されています。

Solaris インストールプログラムの使用

Solaris 10 OS DVD に収録されている Solaris インストールプログラムは、グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface、GUI) を使用して、またはリモートコンソールで対話式テキストインストーラとして実行できます。Solaris Device Configuration Assistant は、Solaris インストールプログラムに含まれています。

SPARC ベースシステムではなく、x86 ベースシステムの手順に従ってください。詳細は、インストールした Solaris 10 オペレーティングシステムのバージョン用の Solaris 10 Release and Installation Collection を参照してください。このドキュメントは、以下の URL で入手できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/solaris.10>

インストール済みの Solaris OS を設定すると、Solaris インストールプログラムでシステムが再起動され、ログイン画面が表示されます。その時点でのメッセージが表示され、システムにプリロードされているソフトウェアを示します。

Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Solaris OS を再インストールする場合、または別バージョンの Solaris OS をインストールする場合は、『Solaris 10 インストールガイド (基本編)』(820-0176) を参照してください。

Solaris オペレーティングシステムのダウンロード

Solaris OS のソフトウェアは、次の Web サイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.sun.com/software/solaris/get.jsp>

- パッチをダウンロードするには、製品の Web サイトで、適切な Solaris パッチのページに移動してください。

<http://www.oracle.com/goto/x6270m2/>

索引

C

CPU ヒートシンク、位置, 2

D

DIMM、位置, 2

G

GRUB メニュー, 37

I

ILOM

ログアウト, 27

ログイン, 23

 Ethernet 接続, 25

 シリアル接続, 24

設定, 21

M

Microsoft Windows Server, 4

O

Oracle Enterprise Linux, 4

Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム

 ダウンロード, 40

 準備すべき事柄, 30

Oracle VM, 4

R

RAID 拡張モジュール (REM)、位置, 2

Red Hat Enterprise Linux, 4

S

Solaris 10 オペレーティングシステム、インストール済み, 29

SUSE Linux, 4

U

USB デバイス接続, 20

V

VMware, 4

い

インストール

 準備, 1

インターネットプロトコル (IP) アドレス

 静的 IP アドレスの割り当て, 27

 動的 IP アドレスの設定, 26

え

エネルギーストレージモジュール (ESM)、位置, 2

か

概要図, 2

き

緊急の停止, 18

こ

交換可能コンポーネントの位置, 2

コンポーネントの位置, 2

さ

- サーバーモジュール
 - 電源投入, 16
 - オプションのサーバーコンポーネント, 4
 - シャーシの設置, 13
 - ビデオへのコンソールのリダイレクト, 37
 - フロントパネルインジケータ, 12
 - ボタン, 12
 - ユニバーサルコネクタポート, 12
 - 一般的に使用される用語, 9
 - 出荷, 1
 - 物理仕様, 5
- サポートされるオペレーティングシステム, 4

し

- 仕様
 - 環境, 6
 - 電気, 5
 - 物理, 5
- シリアルポートコネクタ, 20

す

- スタンバイ電源の投入, 16
- スタンバイ電力, 16
 - 検証, 16
- ストレージデバイス、位置, 2

せ

- 正常な停止, 18
- 静的ネットワーク, 27
- 設置作業のチェックリスト, 6

て

- 電源
 - サーバー SP およびホストに主電源を供給, 17
 - スタンバイ電力, 16
 - 電源の切断, 18
 - トラブルシューティング, 18
 - 電源投入, 16
- 電源の停止, 18

と

- 動的ホスト構成プロトコル (DHCP)
 - IP アドレスを割り当てるために使用, 26
- ドングルケーブル, 20

ひ

- ビデオポートへのリダイレクション, 37

ふ

- ファブリック拡張モジュール (Fabric Expansion Module、FEM)、位置, 2
- フラッシュモジュール (FMOD)、位置, 2
- ブレードサーバーモジュール、IP アドレスの設定
 - 静的割り当て経由, 28
 - 動的割り当て経由, 26

ま

- マザーボード
 - コンポーネントの位置, 2

ゆ

- ユニバーサルコネクタポート, 12